



TITLE:

ニーチェとキリスト教倫理(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

中村, 正雄

CITATION:

中村, 正雄. ニーチェとキリスト教倫理. 京都大学, 1965, 文学博士

ISSUE DATE:

1965-06-22

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211543>

RIGHT:

【 4 】

氏 名	中 村 正 雄 なか むら まさ お
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 15 号
学位授与の日付	昭 和 40 年 6 月 22 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	ニーチェとキリスト教倫理
論文調査委員	(主 査) 教 授 島 芳 夫 教 授 野 田 又 夫 教 授 高 田 三 郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は序論「ニーチェとその時代」、第一章「キリスト教に関するニーチェと十九世紀の先行諸思想との関係」、第二章「ニーチェにおけるキリスト教倫理批判の哲学的基礎」、第三章「ニーチェにおけるキリスト教倫理批判の成立」、第四章「ニーチェにおける過去の価値の否定」、第五章「ニーチェにおける価値転換者の自覚」、第六章「ニーチェにおける将来的価値の肯定」、終論「残された問題」より成る。序論においては、著者はニーチェの時代背景を描写し、「反時代的考察」における彼のドイツ時代精神とその文化の批判者としての立場を特徴づける。本論第一章は、ヘーゲル、フォイエルバッハ、ブルノー・パウエル、マルクス、ショーペンハウエル、キェルケゴールにおいて代表される十九世紀の思想状況を詳細に分析し、特にキリスト教に関して、ニーチェとこれらの人々との思想上の異同関係を明らかにする。ニーチェはヘーゲルのキリスト教の哲学的体系化に反対し、フォイエルバッハ、マルクスの無神論の流れに属すると共に、而も彼のキリスト教は、パウエル、ショーペンハウエル、キェルケゴールに見られる、真実のキリスト教精神把握の試みの極めて独特な一例と見ることが出来るという。第二章はニーチェのキリスト教批判の哲学的基礎を論ずる。著者は序論において、ニーチェのキリスト教批判の思想的基礎は既に初期の著作に認められ、この点で彼の批判は一貫していると見るが、その基礎を成すのは、彼岸性よりも此岸性、存在よりも生成を重んじ、真理への意志を力への意志として理解することにあるとする。第三章はニーチェのキリスト教批判の成立をその全体の過程にわたって明らかにする。著者によれば、ニーチェはキリスト教を現世に対する憎悪、情念の罪惡視、虚無、終末への思慕、生の道德化の所産と見做し、このような特徴は総て「没落への意志」の徴候とされる。著者は更にニーチェのキリスト教批判を次のように展開する。ニーチェのキリスト教理解の特徴はキリスト教の創始者とその後継者との間に根本的断絶を想定すること、新約聖書の中に描かれたイエスそのものの像と既にその中に見られるキリスト教神学とをその根源において全く異質的と見ることにある。イエスの本来の姿はこの地上の生活における行為の中に認められるが、キリスト者は単に信仰の中に生き、真のイエスの代りに、パウロの解釈による救済者としてのイエス

の姿が掲げられる。このキリスト教によるイエス像の顛倒の主原因はこの宗教のユダヤ教的性格にある。これに反し、キリスト教とギリシャ文化との間には多くの対立がある。神と人間、宗教と自然性との関係は両者において全く相違する。而して、自然性の肯定に基づくギリシャ的徳をその反自然性の理想によって克服したキリスト教は、文芸復興によって中世神学から解放された近代人を再びその反自然性の倫理によって畜群の存在にかえようとするのであり、ここに近代人の精神的病根が存在する。キリスト教によって支えられた西欧倫理においては無神論は無倫理を意味する。人間の罪責、負目という観念は元来神に対する負目を意味した。この神はもと種族神、血縁神であったが、それがキリスト教の神として最高神にまで高められると共に、最大限の負目・罪の意識をもたらした。だから、無神論の勝利はこの最大の負目からの人類の解放をもたらすであろう。そして、神の信仰の死はニーチェにおいては自然性の肯定としてのディオニュソスの神の復活に他ならない。而も重大なことは、神の信仰の死は実は神が人間に対して要求する誠実性の徳の徹底の結果であることである。かくして著者は、ニーチェはキリスト教的誠実性に徹底した結果、この宗教の考え方と生き方を拒否せざるを得なくなったとする。

著者は更に進んで、ニーチェはキリスト教によって支持された西欧の過去の価値秩序を破壊することに最も徹底的であったが、この過去の破壊は過去の謂わば弁証法的発展の結果であり、ある意味ではキリスト教的精神の独自の表現であるとさえいえる面があることを力説する。この点を明らかにしたのが第四章以下であり、著者の最も力を注いだ部分に属する。第四章はニーチェの価値転換の試みをその全体にわたって明らかにする。著者によれば、ニーチェによる「神の死」の宣言とそれに伴うニヒリズムは西欧における古い価値秩序の拒否であるが、それはまた新しい価値秩序の建設でもある。そして、この新しい価値秩序は少なくともその一面においては、古い価値秩序と連続するところがある。即ち、彼があれ程無遠慮に批判したキリスト教的伝統の若干のものが彼の中に形をかえて生きているのである。そこで著者は、ニーチェのイエス像が如何なるものであったかを究明する。イエスはユダヤ教の律法の形式主義を捨ててその精神を生かした。「愛は律法を全うする」という彼の福音書の言葉がこれを示す。同時に、イエスの愛は古代社会の応報主義の倫理の超克であった。而もこの価値の転換はイエスの実践とその十字架上の死によって行われた。イエスのこのような生と死の意味をニーチェは宗教的に理解せず、一つの心理的典型として捉え、これをもって根源的キリスト教の精神とする。心理的典型とはイエスにおける無私な人格と行為の統一性をいうのである。天国とは心の一つの状態であり、このような生は「真理における生」として日常的生とは反対である。ニーチェにとっては、イエスの偉大さは彼の生と真理の同一性を実行した点にあり、信仰の対象としての救世主にあるのではない。著者は更に、ニーチェのイエス像の重要な特色としてその終末論的基礎に注目する。イエスが徹底した現世的価値の否定により、現世の權威によって断罪されるという事実の中には、彼の現世の拒否と熱烈なる来世乃至永遠に対する希望とが密接に結合していることが注意されねばならない。そこには、神の国の到来は自己の死によらねば不可能であるという「運命愛」が認められる。かくして、イエスとニーチェの間に、1. 現実否定、2. 将来肯定、3. 価値転換、4. 将来の現在に対する優先において共通契機を見出すことが出来る。それ故、この共通契機の故に両者を共に終末論的実存的人間として規定することが出来る。第五章、第六章では、著者は、ニーチェの価値転換における終末論的性格といわれるものは単にキリスト教的に捉えられ得ず、同時に青年時代よりの彼のギ

リシャ研究に媒介された彼自身の独自の体験と思索の所産であることを明らかにする。ニーチェはイエスと同様に、自己を価値転換の使命を担えるものとして自覚した。然しこの自覚の成立の特徴的な契機として「運命の愛」がある。ニーチェのワグナーからの離反は体験としての運命愛である。これに対して、ギリシャ悲劇の運命観は認識としての運命愛として彼の運命愛の概念の成立に最大の力をもつ。彼はソフォクレスの「オイディプス王」について、その悲劇を単に罪過の応報と見ず、苦悩の中に人間の浄化の過程を認める。苦悩を通して自己の運命を完成するところに高貴な徳の本質がある。そして、かかる運命愛はイエスの最後の決断においても認められるのであるが、ニーチェも亦最後に「わたしは一箇の運命である」という自覚に達する。ニーチェの運命愛はキリスト教の摂理に代るべき新しい形而上学的意味をもつに至った。この運命愛を成立させるのは運命にたえる高貴なる意志、即ち力への意志である。かかる主体的意志の立場において永遠回帰の哲学が始めて正しく捉えられる。永遠回帰とは同一なるものの永遠な回復を意味するが、それは現存在の肯定の最高方式であり、ニヒリズムをその極限において克服するものである。運命愛は永遠回帰への実存的決断に他ならない。而して、この決断の目標が超人である。人間は不完全であり、超克さるべき存在である。この不断の運命愛による自己克服の課題が超人である。超人は一種の超越であるが、それはキリスト教の神と異なり、大地から離れず、謂わば内在の極限における超越、「内在的超越」といい得よう。それは他面、ジンメルのカント的解釈の如く、単に倫理的要請と見ることも出来ない。永遠回帰や超人は単なる要請でなく、形而上学的真理であり、更にまた単に倫理的でなく、寧ろゲーテ的ディオニュソスの全人の立場において理解すべきであるとする。「終論」では、著者はニーチェのキリスト教批判の現代的意義を論じ、それはキリスト教の自己超克の一つの試みとして見られるべきこと、「力への意志」の哲学や合理主義の批判に対しても、その長短を共に公正に明らかにし、「決断としての本来の実存」に生きることとわれわれの学ぶべきニーチェの根本的態度があるとする。

参考論文「ニーチェとキリスト教」はこの両者の関係を現代の神学的キリスト教学的研究を採用しつつ全体的総合的に論じている。

論文審査の結果の要旨

著者のニーチェ研究において特筆すべきことは、ニーチェの複雑多岐にわたる思想内容をその全著作を通じて明晰に把握するに努めると共に、キリスト教神学と倫理学とを主軸とする西欧近代思想史を背景としてその意義を明らかにしたことである。著者はこのために多年の研究によってニーチェの徹底的理解を行うと同時に、西欧のキリスト教を土台とする古い価値秩序の破壊において共通の流れに属する十九世紀の代表哲学をも研究し、ニヒリズムの思想系譜の闡明に努めた。この際、キリスト教とその倫理の批判の意義を明らかにすることがその中心テーマを成しているが、これは著者の如きキリスト教の伝統から自由な立場の人にしてかえってよくなされると思われるのであって、この点に本論文のもつ一つの特色と意義とがある。固より、ニーチェのキリスト教批判には多くの偏見があるし、また著者自身もこのことを無視しているわけではないが、然しこの宗教の神学や教会、信者の在り方が誠実に生き、考える人々に種々の問題を提供して来たことも事実である。著者はこのニーチェの反キリスト教的考え方とその根源をほぼ餘すところなく究明する。次に、著者はニーチェのキリスト教批判の基礎には、単に否定的批判にとどまら

ずして寧ろそれと深く結びつくものが若干存在することを強調する。それは、誠実性の徳、終末論的体験、自己超越への意志、無私な人格としてのイエスの生き方に対する共鳴の中に認められる。この共通性の存在はニーチェの考え方と基督教の考え方が全然逆であることによって制約されているにも拘らず、ある程度認められる事実であり、著者のこの試みは尚問題点を残してはいるが思想史の大きな聯関を示唆するものとして注意されてよい。それはニーチェの思想傾向が西欧的伝統との関係において否定的肯定的両面をもつことを明らかにするのみならず、基督教の信仰、倫理の本来あるべき姿を探る上にも役立つであろう。ただ著者は両者の共通性を論ずる場合、時に慎重を欠く比較をしているのは注意を要する。例えば、ニーチェの運命愛を基督教のアガペーに対比する如き、あるいは、ニーチェの超人の終末論的解釈の如き何れも十分な論証を具えたものとはいいい難い。また、ニーチェの永遠回帰によってニヒリズムの完全な克服が可能かどうか、一段の検討を要しよう。然し全体として見れば、本論文は著者の広い視野と豊かな学識とをもって、ニーチェを中心とする西欧ニヒリズムと、基督教並びにその倫理との歴史的主体的関係を究明したものとして高く評価されるべきである。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。